

M-GTA 研究会 News Letter No.85

編集・発行：M-GTA 研究会事務局(立教大学社会学部木下研究室)

メーリングリストのアドレス: grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ: <http://m-gta.jp/>

世 話 人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、倉田貞美、小嶋章吾、坂本智代枝、
佐川佳南枝、竹下浩、田村朋子、丹野ひろみ、都丸けい子、根本愛子、
林葉子、宮崎貴久子、山崎浩司（五十音順）

<目次>

◇第 77 回定例研究会報告

【第 1 報告】 3

山田 牧子:東日本大震災被災高齢者のリカバリーとスピリチュアリティ—宗教家
のボランティアらのスピリチュアルな支援—

【第 2 報告】 12

河本 乃里:就業継続3年が職業継続意欲へ及ぼす要因の検討—看護師におけ
る3年神話の検証から—

【第 3 報告】 23

吹原 豊:大洗コミュニティの移住労働者の日本語習得過程

◇近況報告(領域／キーワード)(五十音順) 33

飯島 律子(家族介護／介護者支援)

佐鹿 孝子(小児看護学／障害のある子どもと人々)

鈴木 由紀子(成人・老人看護学／臨地実習指導者)

◇第 78 回定例研究会のお知らせ 35

◇編集後記 36

◇第77回定例研究会報告

【日 時】2016年11月12日(土) 13:00～18:00

【場 所】大正大学 7号館4階742教室

【出席者】91名

網木 政江(山口大学)・有野 雄大(川越少年刑務所)・飯島 律子(放送大学)・石丸 智弥(横浜国立大学)・伊藤 尚子(立教大学)・伊東 美佐江(川崎医療福祉大学)・伊藤 恵(新潟大学)・伊藤 由刈(新潟青陵大学)・井上 みゆき(山梨県立大学)・岩崎 美香(明治大学)・内海 知子(香川県立保健医療大学)・小川 久貴子(東京女子医科大学)・長田 知恵子(聖路加国際大学)・落合 賀子(順天堂大学)・梶原 はづき(立教大学)・加藤 志保子(帝京大学)・鴨澤 小織(日本大学)・唐田 順子(国立看護大学校)・川上 由貴(日本体育大学)・河本 乃里(山口県立大学)・木下 康仁(立教大学)・木村 麻理(大正大学)・栗原 あゆみ(星槎大学)・小嶋 章吾(国際医療福祉大学)・後藤 晃一(東海大学)・後藤 喜広(東邦大学)・小山 道子(上武大学)・齊藤 葉子(日本社会事業大学)・坂井 真愛(川崎医療福祉大学)・坂本 智代枝(大正大学)・櫻井 一江(順天堂大学)・佐々木 秀夫(慶応義塾大学)・佐鹿 孝子(埼玉医科大学)・三部 ひさこ(東京医科歯科大学)・重枝 裕子(日本女子大学)・篠原 裕子(地域包括支援センター)・菅原 至(上越教育大学)・鈴木 康美(埼玉県立大学)・鈴木 由紀子(浜松医科大学)・鈴木 由美(国際医療福祉大学)・清野 弘子(日本通運株式会社)・高 祐子(複十字病院)・高橋 信雄(放送大学)・高橋 暢介(在宅リハビリテーションセンター草加)・竹下 浩(職業大)・舘野 由美子(虎の門病院)・田中 満由美(山口大学)・谷岡 三千代(尾中病院)・玉城 清子(沖縄県立看護大学)・丹野 ひろみ(桜美林大学)・千葉 洋平(日本福祉大学)・詰坂 悦子(順天堂大学)・手間本 千夏(大正大学)・寺田 由紀子(帝京大学)・都丸 けい子(聖徳大学)・富永 祐子(国際交流基金)・永野 淳子(日本赤十字秋田短期大学)・中村 拓人(神奈川県立保健福祉大学)・長山 豊(金沢医科大学)・生天目 禎子(帝京大学)・並木 まゆ子(桜美林大学)・西巻 悦子(昭和女子大)・根本 愛子(国際基督教大学)・根本 泰明(白百合女子大学)・土師 しのぶ(金沢医科大学)・早坂 純子(国際医療福祉大学)・林 葉子((株)JH産業医科学研究所)・早瀬 賢一(一般財団法人電力中央研究所)・平川 美和子(弘前医療福祉大学)・廣川 恵子(川崎医療福祉大学)・広瀬 安彦(日本生産性本部)・吹原 豊(福岡女子大学)・福田 侑子(山口大学)・藤木 真由美(帝京大学)・堀江 久樹(国際医療福祉大学)・マクドナルド ダレン(大東文化大学)・真崎 昌子(筑波大学)・猿爪 優輝(北里大学)・増田 昌幸(東京工業大学)・松元 悦子(宇部フロンティア大学)・三ツ橋 由美子(国際医療福祉大学)・森井 展子(山王リハビリ・クリニック)・柳井 猛晶(東洋大学)・柳井 康子(白百合女子大学)・山崎 浩司(信州大学)・山下 尚郎(ルーテル学院大学)・山田 英治(裁判所)・山田 牧子(日本保健医療大学)・山本 容子(東邦大学)・横山 豊治(新潟医療福祉大学)・山川 伊津子(ヤマザキ学園大学)

【第1 報告】

山田牧子(日本保健医療大学)

Makiko YAMADA : Japan University of Health Science

東日本大震災被災高齢者のリハビリとスピリチュアリティ—宗教家のボランティアらのスピリチュアルな支援—

Recovery and Spirituality of the suffering elderly affected by the Great East Japan Earthquake:—Spiritual support of the religionist volunteers—

① 問題意識の芽生え

「看護師は個人、および家族が病気や苦難に立ち向かえるように援助するばかりではなくこれらの体験の中に意味を見出すよう援助することの準備がなければならない。¹⁾」とあるように、看護は、病にある人々の援助やケアの目的を、苦難の中でその人が生きる意味や望みを見出していき、というスピリチュアリティという文脈を含め支援していかなければ、その人の全人的な回復にはつながらない。また、看護に限らずどのような職種であってもその視点にたってケアしなければ、支援を受ける人にとってその支援は空虚なケアとなってしまう。人生の困難な過程に、意味や価値、目的を見出すことを援助するために、スピリチュアリティは核心となってくる。

筆者は看護師として、高齢者が重い病を抱えて生きることや死に立ち向かう場面に多く出会った。病や障害によって様々なことができなくなり自信を失い、うつ的になる方も多いが、一言も不平を言わずに、現状をあるがままに受け入れて穏やかに人生を歩みきるような強さを持つ方にも出会った。そのような人たちが、病気や苦難の中にあってどのように心穏やかに状況を受け止めていけるのか、不思議に思っていた。現場での経験からは生き方や価値観などのその人の持つスピリチュアリティが関わっているのではないのかと感じていた。

高齢社会を迎え、高齢者ケアを取り巻く社会情勢は、2000 年の介護保険制度の導入以降、地域や在宅がケアの場へと再規定された。人々が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう高齢者の日常を支える生活支援体制への取り組みが、求められるようになり²⁾、保健・医療・福祉領域にまたがった包括的なケアを推進する地域包括ケアシステム³⁾の体制作りがそれぞれの地域で取組まれ始めている。在宅ケアは包括的な視点に立った支援が必要とされているが、その人が障害や病を抱えながらもその時々揺らぐ人生の意味を再構築できるように支えるスピリチュアリティに配慮する支援が求められる。そのため地域で生活する高齢者を支えるために、老いや障害で容易に脅かされやすい高齢者の、困難の中での意味や価値、目的、希望や力を見出すためのスピリチュアリティを支えるケアを改めて考察していくことが必要と考える。

¹⁾ Joice Travelbee : 人間対人間の看護. 長谷川浩 藤枝知子訳, 医学書院, 2006 年, 13 頁

²⁾ 内閣府 : 平成 26 年版高齢社会白書, 2014 年, 83 頁

³⁾ 厚生労働省 :

http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/
(2016.11.19 閲覧)

そのような問題意識を持つ中、2011年3月11日の東日本大震災があった。津波は筆者の故郷である東北地方沿岸部の広範囲を覆い尽くし、美しい風景は破壊されたくさんの命が失われた。被災地では震災直後から、布教目的ではなく、心の奥の深い痛みをケアしようと、多くの宗教者が被災地に入り、被災高齢者を慰め励まし続けた。筆者は故郷の人々をなんとか支えたいと思っていましたが、震災後に被災地支援をしている宗教者を知る機会を得たことから、支援に同行して被災地をボランティアで訪れている。悲惨な状況下にあるにもかかわらず、その時にお会いした高齢者の中には「困難な中でも感謝です」という方がいた。窪寺は「死の危機はスピリチュアリティを覚醒し、達成不能になったそれまでの人生意味や目的が変わって、新たな意味や目的を見つけ出そうと働くその時、現実の死に打ち勝つための人生の意味・目的や、死後の世界の可能性を見つけ出す必要から、人間の知性や理性を超えた世界にその解決を求める。このスピリチュアルな世界から得られるものは、死の危機で失われた存在の枠組みと自己同一性の回復である。この回復こそ、新たな人生の出発を可能にする癒しとなる。⁴⁾」と述べている。窪寺はホスピスでのチャプレンとしての経験と、危機体験とスピリチュアリティに関する研究からこの定義を導き出している。筆者は、支援を受ける被災高齢者が、問題を抱えたただ一方的に保護を受けるべき存在ではなく、弱さと同時に生きる希望を持ち困難から立ち上がる強さを持っていると感じた。

日本では、臨床で宗教者やスピリチュアルケアを専門に行う、スピリチュアルケアのスペシャリストと協働していくことがまだ文化として少ない。しかし、一般病院での臨床宗教師、チャプレンの導入や、在宅ケアで臨床宗教師が活躍したり、するなど、ここ数年で日本でも徐々にその機会は増えてきている。実際に震災という死と喪失の現場で取組まれた被災高齢者のニーズに答えながら支え続ける、宗教者によるスピリチュアルな支援を受けた被災高齢者の経験を分析することは、容易に困難や苦難に遭遇しやすい高齢者の命の質的な追求や個人の総合的な幸福感 (well-being) という視点から QOL を目指す支援のために意義があると考えます。本研究では苦悩に打ち勝って生きる力を再び取り戻す、リカバリーに関わるスピリチュアリティを支えた宗教者の働きは何かを明らかにするため、宗教者からの支援を受けた被災高齢者からのインタビューを質的帰納的に分析することを目的とした。

本研究では、支援の目的概念を、筆者がお会いした被災高齢者の「いやなことを忘れるということではないけれども別な意味でもう笑顔に帰ってきている」という言葉に象徴される、被災高齢者が、決して前と同じ状況に戻るわけではないけれども、希望を抱き苦悩を乗り越え生きてく、といったリカバリーの過程であることとした。

リカバリー概念は、1980年代後半ごろから、精神疾患や障害を持つ人々が自分たちの生きられた体験から生まれた⁵⁾。社会や専門家の持つ負のイメージの障害観が、障害を持つ当事者たちにスティグマや偏見をもたらし、本人たちの生きる希望を奪ってしまっているということが、明らかにされてきた。エンパワーされることや意味ある役割の獲得、そして病や障害があっても希望を持って有意義な人生を生きていくことができること、当事者の権利など、人の当たり前に望むような生活や生

⁴⁾ 窪寺俊之：スピリチュアルケア学序説。三輪書店、2004年、13頁

⁵⁾ 野中猛：リカバリー概念の意義、精神医学、47巻9号、2005年、952-961頁

き方の実現ということに主眼を置いた概念である。日本では、リカバリー概念は 2010 年ころに精神保健領域で共有されるようになった⁶⁾。最近では高齢者のリハビリテーションの分野などでも、リカバリーという言葉が存在の回復といった文脈で使用されている⁷⁾。障害を医学モデルでとらえると、欠損を「元に戻す」ことを目標に、自己の障害の状況の受容を障害者の課題として介入が行われる。これに対し、田島は、近年の日本のリハビリテーションがクライアントの価値を能力で測り、その「存在価値」を蔑ろにした能力主義を問題視し、対象者の「存在価値」をありのままに肯定する作業療法学の必要性を主張した⁸⁾。野中は、専門家や専門機関などの社会環境からの見方が、当事者がリカバリーに向かうことを助けようとしているのか、邪魔しようとしているのか、ということにも注目する。医学モデルに基づいた保護・管理という伝統的な援助が、悪気はなくとも当事者のリカバリーを阻害してしまうことがあり、時にはそこから逃げ出すこと、あるいはそこを変革することがリカバリーの目標になるかもしれない。そして、リカバリーの結果を病気や障害がなくなるのではなく、意義ある人生の目標を達成することと述べている⁹⁾。

② 専門分野の先行研究との重なりと差異

海外では、1990 年代より、リカバリーとスピリチュアリティの関係を示唆する研究が散見されるようになってきた¹⁰⁾。栗生田は、高齢者の病と障害の体験からのリカバリーについて、病や障害の体験記述をしている先行研究から、肉体の加齢現象によって失ったエネルギーを賦活していくことが必要であるとして、病や障害を負った後の感情の落ち込み現象と元に戻りたいという願望を持つことや様々なプロセスをたどるが、高齢者が確実にリカバリーしていることを概観した。そして自らが現場で経験したことから、高齢者が身体エネルギーや認知エネルギーの喪失を最小限にして、エネルギーの賦活に影響するリカバリーの本質について、感情の安寧、高齢者の日常性の感覚、つながりの感覚、見通しがある感覚、存在の回復などが糸口になるのでは¹¹⁾というスピリチュアリティに関わる内容を論じているが、実証的には明らかにしていない。橋本は欧米のリカバリーとスピリチュアリティに関する文献をレビューしている。レビューにより、宗教とスピリチュアリティがリカバリープロセスに重要な構成要素であることをあきらかにしている¹²⁾が、これもそのまま日本人に当てはまるのかということに関しては、さらに研究が必要である。岡本は介護が必要であり、福祉サービスを利用して生活を営む高齢者が、どのようなスピリチュアルなテーマに直面しているか、「生きる意味」に焦点を当て、質的研究を行った。その結果、生きる意味は「人生の節目を乗り越えてきた」「ただ平凡

⁶⁾ 野中猛：障害論から見たわが国におけるリカバリー論の展開，精神科臨床サービス，第 10 巻第 4 号，2010 年，446-451 頁

⁷⁾ 栗生田友子：高齢者の病と障害の体験からのリカバリー，老年社会科学，第 37 巻第 1 号，2015 年，48-56 頁

⁸⁾ 田島明子：「存在を肯定する」作業療法へのまなざし—なぜ「作業は人を元気にする！」のか，2014 年，三輪書店

⁹⁾ 野中猛：リカバリー，中央法規，2011 年 36-37 頁

¹⁰⁾ 橋本直子：精神保健福祉におけるスピリチュアリティへのアプローチ—欧米の文献からの一考察—，Human Welfare，第 6 巻第 1 号，2014 年，35-46 頁

¹¹⁾ 栗生田友子：高齢者の病と障害の体験からのリカバリー，老年社会科学，37 巻 1 号，2015 年，48-56 頁

¹²⁾ 橋本，前掲書，6)

に人間らしく生きる」「超越的なものとつながる」「死に思いを馳せる」「有限な存在として生きる」「責任を果たして生きる」といったカテゴリーを導き出している¹³⁾。しかし、筆者はこの研究でのカテゴリー一名が、生きる意味を充足するためのニーズなのか、現在が充足している状態なのかが十分に説明されていないという印象があり、その構造が十分に理解できにくいと感じた。岡本もこの論文ではカテゴリー間の関係性を分析すること十分にできておらず今後の課題としている。高齢者の生活上のスピリチュアルなニーズとニーズを満たされる、または満たされなかったプロセスと、満たされるためにはどのような要素が必要なのかについてはさらに研究が必要と感じる。日本ではチャプレン、ビハラー僧、臨床宗教師、スピリチュアルケア師などがスピリチュアルケアの専門家として臨床で活動の場を少しずつ広げている¹⁴⁾¹⁵⁾。チャプレンの働きに関する先行研究は、死の臨床におけるチャプレンの働きについての事例研究¹⁶⁾があったが、筆者の見た限りでは日本の高齢者の苦難からのリカバリーに関わる宗教者の働きとスピリチュアリティの関係について実証し、論じた研究はまだ見られていなかった。被災高齢者にとってスピリチュアリティが苦難からのリカバリーに果たす役割を知ることや、スピリチュアルケアラーとしての宗教者のどのような支援が生きる力を生み出すのかといったことを明らかにすることは、実践への応用に役立ち援助的にも意義がある。

③ M-GTA に適した研究であるかどうか

被災地での高齢者の生きた体験としての細かなリカバリーのプロセスとスピリチュアリティの関係について理解するためには、質的研究が適していると考えた。本研究は震災後 4 年がたった時点でのインタビューである。多くの死と喪失をした体験という初期の状態から、どのようなプロセスをたどって弱さを抱えつつも現在を生きていこうと生きる力をリカバリーしていったのか、4 年の間に、宗教者やボランティアや環境などが、その人のリカバリーとスピリチュアリティにどのように影響したのか、そのプロセスと被災高齢者と宗教者のボランティアらとの相互作用に焦点を当てたいと考えた。そのため、データの分析には、人間行動の説明と予測に関わり、現象のプロセスを質的に研究するのに優れているグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いることが適していると考えた。孤独や喪失、死が身近に迫った時に脅かされやすい高齢者のスピリチュアリティを支えるため、生成された理論の実践活用が期待できることも採用をした理由である。

④ 分析テーマへの絞り込み

当初「東日本大震災における高齢者が苦難から回復するプロセス」として分析をした。序論も今とは違う形だった。概念を作ったものの十分に消化できないままでの修士論文となっていた。スピリチュアルケアと宗教的ケアについて事前に文献をレビューして被災地での宗教者とのボランティア

¹³⁾ 岡本宜雄：高齢者が生活上経験するスピリチュアルなテーマに関する研究—生きる意味に焦点を当てた質的研究—, 川崎医療福祉学会誌, Vol.25, No.1, 2015 年, 37-47 頁

¹⁴⁾ NHK ETV 特集 臨床宗教師～限られた命とともに～:

<http://www.nhk.or.jp/etv21c/file/2014/1129.html>, 2016 年 6 月 28 閲覧

¹⁵⁾ スピリチュアルケア師認定について: 日本スピリチュアルケア学会,

<http://www.spiritualcare.jp/qualification/>, 2016 年 6 月 28 閲覧

¹⁶⁾ 谷山洋三: 死の不安に対する宗教者のアプローチ—スピリチュアルケアと宗教的ケアの事例—, 宗教研究, 80 (2), 457-478 頁, 2006 年

の経験もして、ある程度理解していたつもりだったのだが、実際にフィールドに出てみると理解がまだまだ浅い事に気づいた。多様な宗教との連携の場面に出てみると、スピリチュアリティの普遍性の問題をどう捉えるか、や自分の価値観・ビリーフに気づくこと、そこから自由になること、などたくさんの疑問や課題に気づき、そこを学びながら取り組んだ。そのため、そのときの自分の課題であるスピリチュアルケアや宗教的ケアの本質を明らかにするといったことが視点となって分析してしまっていた。林先生にスーパーバイズをしていただきながら、看護の領域に貢献する論文にするためには被災した高齢者が生きる力を得た宗教者のボランティアの働き、とスピリチュアリティがリカバリーに果たす役割はどのようなものだったのかということ意識しなければならなかったということに気づいた。また、被災高齢者という言葉进行分析テーマに入れながらも高齢者ならではの概念生成ができていないことにも気づかされた。そこで現在分析テーマを「宗教者のボランティアらの支援を受けた被災高齢者のリカバリーのプロセス」として視点を変えて分析をし直し、概念生成を高齢者ならではとなるよう概念生成をやり直した。

⑤ インタビューガイド

インタビューでは、①宗教者との関わりのいきさつ、②宗教者の支援で心の支えになったこと、③宗教者の支援以外でも心が癒されたり支えになったこと、④現在の状況、⑤これからの望みなど大まかな点についてはどの対象者にも同じ質問をし、ほかには自由に語ってもらう半構造化面接の形をとった。

⑥ データの収集法と範囲

筆者はキリスト教の信仰を持つが、看護師として、宗教的なものや非宗教的なものどちらであってもその人の持つ霊的視点を尊重するというスピリチュアリティに関心を持っている。帰省中、同じような視点に立って支援をしているキリスト教ボランティアから、震災直後から様々な宗教関係者やキリスト教会・仏教寺院が宗教や教派を超えて支援に入り活動していることを知り、また現地の関係者や市民から実際の話も多く聞く機会を得た。津波を免れた多くの教会や寺院は、震災直後から施設を避難所として開放し、被災者を受け入れていた。震災当日から災害対策本部やサポートセンターを設置し、寄付による活動資金の調達や物資支援を開始していた教団もあった。支援の関わりの中から、様々な団体の存在を知ることができたが、2015年に研究のためのインタビューをお願いする被災者の選定に当たり、協力を依頼する団体について調査した。キリスト教と仏教がともに活動する超教派の活動団体¹⁷⁾では、当初ライフラインがすべて遮断されてしまい、情報源がなくなる中、仙台市内のキリスト教会の各宗派を超えて連携を呼びかけて震災対応の組織を立ち上げた。顔と顔を合わせた情報収集に努め、連絡調整をしながら各被災地へ物資支援をコーディネートしたり心のケアのための傾聴活動を行っていた。また、その活動は仏教・キリスト教を超えた超宗教の活動にも発展していて、クリスマス会などキリスト教的な行事のニーズのあるときには仏教者から連携の依頼があったりするという。超宗教の活動としては、キリスト教の牧師や司祭、仏教の僧侶

¹⁷⁾ 秋山善久 川上直哉:被災地支援と教会のミニストリー 東北ヘルプの働き, 東京基督教大学国際線教センター編, いのちのことば社, 2014年

が震災後、弔いや魂の飢え乾きで救いを求める人たちのために、心の相談室¹⁸⁾を立ち上げ、弔いや悲嘆ケアなどの活動を現在も継続して行っている。活動を踏まえて東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座が 2012 年設立され臨床宗教師の育成が試みられている¹⁹⁾。心の相談室の活動は現在も継続しており被災地での傾聴活動、電話相談、講演、慰霊祭、追悼行脚、ラジオでの活動など幅広い活動を継続している。その活動のネットワークの中で、心の相談室では地域で支援活動をしている寺院や教会などの宗教者とのつながりや情報を持っていた。そこで、伝道目的ではなく地域の避難している人々の苦悩への配慮をし、宗教が違ってものような人にも支援をしている教会や寺院などの情報をいただいて、それらの寺院や教会を紹介していただき、いくつかの仏教寺院とキリスト教会とコンタクトをとることができた。対象の地域は宮城県沿岸 I 市周辺とした。I 市へは被支援者は、避難生活を送る中で、宗教者やボランティアらとかかわりを持った。インタビューに応じてくれた人は、仮設住宅や復興住宅で暮らす 60 歳代から 80 歳代前半の方 12 名(女性 8 名、男性 4 名)である。震災後 4 年が経過した時点でのインタビューである。震災後同地区に支援に入った宗教は仏教・神社神道・キリスト教・新宗教と様々だが、今回は日本人にも比較的なじみのある伝統的宗教である仏教とキリスト教が関わった被支援者を対象とした。筆者も宗教宗派を超えて活動している団体、布教目的ではないキリスト教の団体などいくつかの団体のボランティアに同行し、仮設住宅や集会所で開くお茶の会や集会に参加している被災高齢者にお会いしてインタビューを依頼した。また特定の宗派に属さずに、仮設住宅や復興住宅に住む被災高齢者に物資支援活動をしているボランティアから情報を得て、宗教者が開いている集会に参加したり、宗教者が訪問して定期的に支援をしている地区の被災高齢者を紹介してもらい研究の趣旨を説明し、同意してくれた高齢者にインタビューをお願いした。また宗教宗派を超えて活動している団体から、布教活動が目的ではない活動をしているお寺と教会の情報を得て、そこに関わる宗教者から震災後集会に参加するようになった高齢者で、仮設住宅や復興住宅で生活をする、家を流されるなどの何らかの喪失からのリカバリーをした高齢の方という条件で 4 人の被支援者を紹介してもらった。依頼する時点で身体的に介護を受ける必要がなく、ある程度日常生活が落ち着き、立ち直って自立して生活を営むことのできている方たちと限定して紹介してもらった。

インタビューは個別で行ったが、仮設住宅が狭く、周囲に話を聞くために部屋を確保したり、一人の話を聞く間に待機していただく部屋がなく、別の時間を設けてもらうことも難しかったために、一緒に話を伺う形になった方もいた。グループインタビューになった方は、2 組 4 人であった。グループインタビューでは、グループの相互効果で深い部分まで話が引き出されるという利点がある一方、メンバーの片方意見に引きずられたりする場合があるため、インタビューで、調整し、それぞれ双方の意見を同じように聞くなどして工夫した。また、個別のインタビューでも同様だが、インタビューアのバイアスがかからないように、被支援者の視点で話をしてもらえように、話の中で、わからないことに関しての質問をする程度にして、意見は挟まずに相手の話を引き出すように工夫を

¹⁸⁾ 心の相談室；<http://www.sal.tohoku.ac.jp/kokoro/blog/>, 2016.06.28 閲覧

¹⁹⁾ 東北大学文学研究科実践宗教学寄附講座： <http://www.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/neo/wiki.cgi>, 2016.06.28 閲覧

した。その結果は、研究の目的であるリカバリーの体験や宗教者との体験についてそれぞれが語ってくれ、震災後に感じた気持ちの深いところまで語ってくれた部分があり、互いに話すことで、細かい体験を思い出しながら話せることで詳細な内容が聞けた部分もあった。4 人からはそれぞれの思いや考えを聞くことができた。

⑦ 分析焦点者の設定

修士論文では、分析焦点者の設定を「避難生活の中で宗教者のボランティアらの支援を受けた被災高齢者」とした。

⑧ 分析ワークシート

70 歳代の男性が、宗教者やボランティアらが開いている、お茶飲み会ではかの被災者との関わりの中で、自分に起きた変化についてインタビューで語ってくれた部分である。「一緒に語り合ったりすると、女房無くしたくらいで悲しんでいられないって気もするんだよね。この人はもう家族全員なくしてさ、俺よりも不幸な人見ると、ものすごく元気出るといふかさ、悲しいな悲しいなって自分でおもってもさ、よしこっちも立ち直んなきゃなってって思っちゃうじゃん。」筆者は、この部分を、自分の弱さをさらけ出すことは、人にとって辛いことであるが、負の感情や持つ弱さもありのままの自分として受け入れてもらえることで、自分の弱さも逃げずに直面でき受け入れられるようになった。と解釈し、定義：負の感情や弱さもありのままで受け入れあえる。概念名：「傷も弱さも受け入れあえる」とした。

⑨ 概念の比較の例

概念を比較する中で、コミュニティの交流の中でうまれたものというまとまりが見えた。それには友愛と親密さ、一体感という共通点が見えた。そこで、〈家族のような安心感〉というカテゴリーにまとめた。それに対して人間を超えた神仏の大きさについて知ったり、その神仏に祈ったり、死後の世界について思ったりという、神仏に向かう体験と言うまとまりがあった。そこで〈時空を超えた大きさに浸る〉というカテゴリーにまとめた。そして被災高齢者がそれらと【つながる】ことで心の癒やしや心の変容と自由を得ていくプロセスになっていくと考えた。

⑩ 現象特性をどのように考えたか

「苦難に遭って心も閉じて暗くなり歩む足下も見えないほどだったところから、自分を超えるほどの大きなものに浸る経験から閉ざされた心がほどけて自由になり開けた広いところに立てた。」

⑪ 概念図とストーリーライン 回収資料

⑫ 会場からのコメントの概要

スピリチュアルケアは宗教者しかできないのか、といった質問を SV の林先生からいただいた。

→スピリチュアルケアは宗教者ではなくともできると考えている。スピリチュアルケアはどのような職種であれ援助の核心になると考える。人々の援助やケアの目標をその人の生きがいや意味や望みというスピリチュアリティという文脈を含め支援していくことがその人の全人的な回復に結びついて行くと考える。どのような職種であってもその視点にたつてケアしなければ支援を受ける人にとってはその支援は空虚なケアとなってしまう。

しかし、宗教的な雰囲気に触れたり祈りや宗教的な死生観に触れたりする中から、人が不条理

な苦しみから解放されていく事もあり、宗教を持っていない人も、そのような宗教性に触れたいという欲求を持っていることがある。宗教は死後の安らぎや、永遠や超越という視点から自分を見つめていく機会を与えてくれる。そのようなケアを提供できるのは宗教者であり、そのようなケアを提供できる宗教者と連携していくことは、苦悩置かれた人々のケアの資源となると考える。

会場からはスピリチュアリティとは何かについての質問が多かった。

→スピリチュアリティの定義は文化的多様性などから、開かれた概念化と定義が様々な分野で模索検討されている。この研究では、心の深い部分に内在する個人の人生の意味や目的を探る事や、意味あるつながりを求める側面やその体験といった意味でスピリチュアリティを用いていることを説明した。また看護師のナラティブケアとどのように違うのか、心理的ケアとスピリチュアルケアはどこが違うのかといった質問もあった。心理的ケアは人の不安や人間関係などを扱い、薬物療法や心理療法の対象となるが、スピリチュアルケアはもっと心の奥深くの部分に関わるケアである。スピリチュアルケアはボランティアなどでも省察的でスピリチュアルな感性を持っている人ならば実践できるケアである。ナラティブケアはスピリチュアルケアと共通する部分がある。人生の意味や目的を探求するなど、その人の価値や信念等の深い部分で対峙する事が必要な場面などでは、知らず知らずに援助者の価値観の押しつけなどが起こらないよう、支援者が自分のビリーフから解放されていること、人格的豊かさや、感性を身につけることなど、スピリチュアルケアラーには専門的な教育や訓練が必要と考えている。

概念について、宗教者のどんな働きがネガティブな状況からよい状況につながったのか、というプロセスが見えにくいといった質問をいただいた。この課題に関してはSVの林先生からもご指導いただき現在取り組んでいる最中である。みなさまのご意見を参考に、プロセスが見えるよう、概念生成を見直してみたいと考えている。

⑬ 感想

研究をしているときには、意識しているようで十分に意識しきれていなかった、誰が読み手なのか、を意識して研究を進めていくことが大切だということをSVを受ける中で実感できました。

先生の本の中に、研究する人間が鍛えられていく、人間的成長が促されていくというのがMGTAの本質的な特徴と書かれてありました。今回自分の研究を振り返りSVしていただくなかで、分析過程は、自らが問われ続けるものだったと言うことを振り返りました。大学院生として学ぶ次期にそのような研究方法に出会えたことを感謝しています。SVの林先生からはお忙しい中、研究方法の理解の不足の部分について大変熱心に御指導頂いたことを心より感謝申し上げます。また、多くの励ましをくださいました参加者の方々、コメントをいただきました木下先生に、深く感謝申し上げます。

〈参考にした資料、方法論および研究例として参考にした文献〉

木下康二著：ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッドセオリーアプローチのすべて、弘文堂、2007

小倉啓子：特別養護老人ホーム新入居者の生活適応の研究―「つながり」形成のプロセス―，老年社会科学，第24巻第1号，2002

木下康二序文 小倉啓子著：ケア現場における心理臨床の質的研究，弘文堂，2007

山野則子：「児童虐待防止ネットワーク」のマネージメントへの影響要因，社会福祉学，第48巻第2号，2007

三輪久美子：小児がんに向き合う親の経験，保健医療社会学論集，18巻2号，2007

【SVコメント】

林 葉子（(株)JH産業医科学研究所）

1. 目的と研究テーマ、分析テーマ、M-GTAとの適合性について

山田さんの研究テーマは、東日本大震災で被災した高齢者が物資等の支援ばかりでなく、精神的な支援（具体的には、宗教家によるスピリチュアルな支援）を受けて、生きる意欲を回復させていったかを検討するものです。多くの身近な人たちが亡くなっていったのを目の当たりにして、震災がなくても、喪失感があり、回復力も低下している高齢者にとっては、精神的な支援は必要な支援だと思います。そういう意味でも、山田さんの研究課題は、大変有意義な研究ではないかと考えます。

研究背景も、問題点も、レジユメのなかで、きちんと述べられており、M-GTAで分析されるべき課題であるかどうか明確になっていました。当初は、宗教家だけではなく、一般のボランティアからの支援を受けていることも含まれていましたが、スピリチュアルケアのある意味での専門家としての宗教家に特化した研究のほうが、今後、精神的ケアを含めた一般的な支援をする方々が参考にするには、良いのではないかと考え、分析テーマを宗教家の支援を受けた高齢者にすることをアドバイスしました。また、当初の分析が宗教学的の様相が見受けられたので、どの研究領域に即した研究であるかどうか、再度、確認し、看護領域で参考になる結果を念頭におくようにアドバイスしました。広い意味でも看護領域にもケアの精神が必要であるということを会場から助言を受け、山田さんも真摯にアドバイスを受け止めておられたので、さらに良い研究となると思っています。

3. 分析結果

最初の結果図は、スピリチュアルケアの基本的な理念と宗教色が濃くでたもので、対象者の姿や、支援者との相互作用、他の人や社会的環境等との相互作用が見受けられないものでした。こういった様相は初学者や、研究課題にのめりこみすぎている方によく見られることでしたので、M-GTAの基本に戻っていただくように、アドバイスをしました。山田さんの場合には、いくつかの概念は良いものがありましたので、再度、以下の点に気を付けて概念生成をしておしていただくことで、だいぶ良くなっていきました。①分析焦点者の視点にたつこと ②分析焦点者と宗教家との相互作用に注目すること ③スピリチュアルケアに固執せず、データオンの姿勢を持ち続けること。④なぜ、被災高齢者がそのような行動、言動となったかに注目すること ⑤将来、結果を利用する人が具体的な方法について理解しやすい概念かどうかを検証すること。

修論のときの指導教官が宗教の領域の方だったので、致し方ない部分はあったようですが、看護系の雑誌に投稿したいという山田さんの目的と M-GTA による分析の目的から考えると、概念生成をやり直すことが必要であると考えています。木下先生からもアドバイスとしておっしゃっていたとおり、宗教家の支援を受けた被災高齢者が分析焦点者なので、宗教家と高齢者との相互作用の見える概念を生成していくと、良い結果がえられると確信しています。

最後に被災高齢者ならではの概念作りにも心がけて、良い結果を出していただければと思っています。今後の被災者支援には、とても重要な課題で、有意義な研究ですので、これからも被災高齢者の方の支援し続ける宗教家ではないボランティアの方々が、スピリチュアルな支援もできるヒントを提示できるような結果を出していただきたいと思っております。山田さんは、M-GTA の分析の基本的なことを理解できていらっしゃるの、かならず、良い論文が投稿できると信じております。

【第2報告】

河本 乃里（山口県立大学大学院 健康福祉学研究科 健康福祉学専攻 前期博士課程2年）
Nori KAWAMOTO : Master's Program, Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University

就業継続3年が職業継続意欲へ及ぼす要因の検討—看護師における3年神話の検証から—
Study of factors affecting motivation to continue a nurse career in the process of the first three years —Does there exist “The First 3 years Myth in Nurse”?—

1. 研究の背景と研究目的

2025年の日本は、団塊の世代が75歳を超えて後期高齢者となり、国民の3人に1人が65歳以上、5人に1人が75歳以上という超高齢社会を迎える。厚生労働省の試算では、需要に対して看護師数万人が不足するとし、看護職員需給見通しに関する検討会が発足するなど看護師確保は超高齢社会の喫緊の課題の一つである。

近年では、新人看護師の早期離職が問題となり、看護基礎教育の充実が検討され、新人看護職員の教育では、2010年に卒業後臨床研修が努力義務化された。各医療機関において新人看護師の教育体制が整備され、その後の2011年の病院看護実態調査では、新人看護師の離職率は7.5%（2007年9.2%、2009年8.6%）に減少した。しかし3年目看護師の離職率は12.8%、5年目は12.6%と、全体の10.9%に比べて高かった。また厚生労働省が発表した新規学卒者の3年以内の離職状況32.3%（1年目12.5%、2年目10.0%、3年目8.5%、2010年3月卒業者の状況）と比べると新人看護師の離職率は低いが、3年目離職率は看護師が高い。看護師国家試験の新卒者合格者数と新人看護師離職率から退職者数をみると2009年以降も毎年約3700～4000人

の新人看護師が離職している。看護系大学が増え、新卒者の母数も増えているため離職率からはみえない看護師の早期離職の問題は現在もかわりなく続いている。

看護職員就業状況等実態調査(2010)の看護師全体の退職理由は、出産・育児・結婚等のライフイベント、他施設への興味に次いで人間関係がよくない、という順だった。先行研究から3年未満の看護師の離職要因をみると、知識や技術の未熟さ、職場内の人間関係、勤務時間、指導体制等(内田 2015、糸嶺 2012 他)、新人看護師ではとくに、リアリティショック、消極的な職業選択動機(小野田 2012、松下 2001)が離職要因であった。晩婚化の影響もあるためかライフイベントは低い。

Patricia Benner(2005)は、「一人前レベルの看護師とは、似たような状況で2、3年働いたことのある、看護師の典型である」と述べている。各医療機関が取り入れているクリニカルラダー等の教育システムも3年目までに「一人前」の看護師を育成すべく段階別教育を行っている。このことから看護師は2、3年働くと看護師として仕事をするために必要な力を身につけることができるとの共通認識があるように解釈できる。しかし、3年以内に離職するケースも多く、看護師としての「一人前の過程」を中断している実態が後を絶たないといえる。看護師が一人の専門職業人として自立していくには、最初の3年間の学習や経験が重要であると考え、職業継続への不安や戸惑いを抱えながらも3年就業継続できた過程にどのような要因があるのか明らかにすることは、看護師のキャリア開発やマンパワー確保への貢献が期待できると考えた。

そこで本研究では、3年就業継続できた4年目の看護師が就職後3年間にどのような経験をし、その事に対してどのような意味づけを行ったか就業継続のプロセスを明らかにする。そしてそれが職業継続意欲にどのように影響したかについて検討することとした。

2. M-GTA に適した研究であるか

本研究は、看護師が就職後3年の間に看護師として仕事ができるようになっていくというプロセス性があり、その過程には、新人看護師として指導を受ける先輩看護師との関係性や、患者との関係性、チーム医療の中での年代も違う様々な看護師、医師、他の職種の医療従事者との社会的相互作用があることからM-GTAに適した研究であると判断した。M-GTAを用いることで離職という現実問題の中で社会相互作用に関係した看護師の就業継続(行動)の説明や予測が可能となり、看護師の就業継続の支援ができると考えた。研究結果は、新人から3年目までの看護師の育成や離職予防において実践で活用でき、マンパワー確保に好影響をあたえることが予測できる。またデータを切片化しないことで文脈を大切にし、意味のあるまとまりとしてとらえるデータに密着した分析方法が看護師の経験の意味を解釈するうえで本研究に適していると判断した。

3. 研究テーマ

「4年目看護師における就業継続3年のプロセス」

就業継続の間には、医療現場の重圧や人間関係などから、「辞めたい」という思いを誰もが一回以上は持つと思われる。そして辞めたいと思いながらも思いとどまるプロセスや、一般にいう組織社

会化、看護実践能力の向上のプロセスなど少なくとも 3 年の間に複雑なプロセスを経験していると考ええる。先行研究では、就業継続や職業同一性形成について、新人看護師の就職後 3 年間の縦断調査した研究や、3 年目までの看護師を対象とした質的研究はあったが、4 年目の看護師を対象とした 3 年間のプロセスや就業継続ができた要因を明らかにする質的研究はなかった。本研究において看護師の複雑な就業継続のプロセスを解明することで 3 年継続する間の就業継続意欲に影響を及ぼした要因、3 年の就業継続が 4 年目以降の職業継続意欲に影響を及ぼす要因も明らかにすることができると考える。また看護の現場では、新人看護師に対して「3 年は頑張りなさい」や「3 年経ったら一人前」など「石の上にも三年」ともとれる新人看護師への励ましがある。「どんな背景や職業選択動機を持つ看護師も 3 年という年月を経れば一人の看護師として仕事を続けていける」のかという現場で生まれた疑問について「看護師における 3 年神話」とし、プロセスを明らかにする中で説明できるのか検証したいと考えた。

【用語の定義】

- ・「新人看護師」とは、看護基礎教育機関を卒業し、学校養成所入学前の時期を含めて看護職としての実務経験がなく、初めて医療機関に就職した者をいう。
- ・「看護師における 3 年神話」とは、新人看護師が 3 年という年月を乗り越えれば、その後も看護師として職業継続していけることをいう。

4. 分析テーマへの絞り込み

「4 年目看護師における新規採用から就業継続 3 年のプロセスの研究」(最初のテーマ)

⇒「新人看護師が 3 年の間に看護師として働くことができるようになっていくプロセス研究」(現在)

はじめは「4 年目看護師における新規採用から就業継続 3 年のプロセスの研究」という大きな分析テーマとした。焦点が絞れておらず分析テーマが大きいと思いながらも他の分析テーマが思い浮かばず分析を行った。データには看護師として成長がみえたため「新人看護師から 3 年が経過する中で専門職業人として自立していくプロセス研究」として再度データを見てみようと考えたが、「専門職業人としての自立」の視点は一度分析をした結果としてわかったことで専門職業人のほかにも社会人としての成長のプロセスもみられた。「要素の特定ではなく、人間のある動態を説明できる理論を目指す」(木下 2007)という点も併せて考えて最終的に「新人看護師が 3 年の間に看護師として働くことができるようになっていくプロセス研究」を分析テーマとした。1 人の看護師として働けるようになり 4 年目以降も辞めずに働き続けてほしい、そのためにはどのような支援が必要かを明らかにしたいと考えこの研究を行っているのだという考えからこの分析テーマに至った。

5. インタビューガイド

インタビューに入る前に確認のため、もう一度調査の目的と概要を伝え、質問があれば答えた。質問は以下の項目の順序ではなく、研究協力者の話の展開や流れに沿って対応した。2 人目以降は、それまでの対象者の質問の答えと同じ内容や違う内容はないか確認する質問を加えた。

1) 看護師を職業選択した理由

- 2) 就職してからこれまでに振り返って印象深い出来事や体験、その時の気持ち、その理由。
- 3) 看護師になってよかったと思うか。その時期やきっかけ、それに関連した出来事、その時の気持ち。
- 4) 就業継続 3 年についてどのように考えるか。今の自分への影響。なぜそう思うのか。
- 5) 新人看護師の頃の自分と現在の自分に何か違いがあるか。それはなぜか。
- 6) これまで仕事を継続できたのはなぜか。
- 7) 仕事ができるようになったと思えたのはいつ頃か、それはなぜか。
- 8) 将来も看護師を継続すると思うか。それはなぜか。

6. データ収集法と範囲

データ収集は、研究者が勤務している病院に勤務する 4 年目の看護師から他の総合病院に勤務する 4 年目の看護師を紹介してもらい、研究協力を依頼した(研究者が師長という立場にあるため研究者が勤務している病院の協力者からは真の語りが得られない可能性があったため。協力の同意の得られた対象者 11 名に対して 45～60 分程度の半構造化インタビューを行った。インタビュー内容は IC レコーダーに録音した。得られたデータを記述し、逐語録を作成した。

得られたデータに照らし合わせてデータの範囲を検討し、同一の職場とは病院ではなく配属された最初の職場とした。対象者 11 名のうち、看護師以外の就業経験や就職後、職場内異動があった 4 名を除く、大卒の急性期病院で勤務している 7 名のデータを分析対象データとした。

7. 分析焦点者の設定

「総合病院に勤務する新規採用後、同一の職場で就業継続した 4 年目の看護師」

対象者の属性は、7 名全員が看護系大学卒業(国立大学 2 名、公立大学 3 名、私立大学 2 名)の 26 歳、女性であった。5 年目以降の就業は、1 名が退職し郷里の他の医療機関で看護職を継続しているがその他 6 名は、現在の職場で就業を継続している。

8. 分析ワークシート

概念名	承認が自信につながる
定義	患者、先輩看護師など周囲からの感謝や信頼などの反応が自分が看護師として認められていると感じる指標となり仕事を続ける励みや支えとなること
ヴァリエーション (具体例)	<p>*たぶん、患者さんのことが一番大きいと思うんですけど、その、患者さんが後から会いに来てくれたりとか、なんか、こう、抗がん剤とかで退院してまた入院してきて、っていうけっこうリピーターの人が多くって、で、患者さんもなんか私の成長を見てくれてるってか、なんか感じるし。1 年目の時はこうだったのにみたいな感じで言ってくれる人とかもいて、でなんか、1 年目の時から知ってくれている人もいて、今、指導しよんやね、みたいな感じで行ってくれる人もいて。なんかそういうこと成長を患者さんが言ってくれたりするのも、嬉しいし。なんか感謝してくれて頼りにしてくれることもうれしいし。うーん、うん。やっぱり、患者さんそれが一番。うーん。(看護師 E7 頁)</p> <p>*まあ、1 年目の終わりくらいで、うーん。自分での自覚というか周りの人から、こういうことできるよう</p>

ヴァリエーション (具体例)	<p>になったね、って言ってくれるようになって。あ、そうなんかな、って思って。あ、よかったなって。(看護師 E 3 頁)</p> <p>*2 年目か 3 年目くらいの時期ですかね。師長さんから年賀状が来る時くらいに「あなたは頼れます」みたいにコメントとかをもらったりすると、上の人からも任せられます、ってみんな言ってますよ、ってこう書いてくださるので。今年も、去年も、あーうれしいな、って。2 年目の年賀状は「頼もしくなってきましたね」ってそういうことを書いてくださってた気がします。先輩とかからも頼りにしてるよとか(看護師 B 9 頁)</p> <p>*1 年の終わりとかにケースレポートの発表とかがあったんですけど、なんかそのときにあー、なんか頑張ったね、とかって先輩にすごい言われて、そういうのとか自信につながるっていうか、あーよかった。1 年終わった、って。なんか頑張ったねとかって言われることって、そうそうないと思う、ないと思うんですけど、よかったよ発表とかで、大変やったけどよかったって。よかった。(看護師 D 5 頁)</p> <p>*できることが増えて来たら患者さんに名前を憶えてもらったりとか。うーん、なんか、こう依頼ごととかされるようになって、患者さんに感謝されたりとか、あの、外来で、また退院して外来に来た時に会いに来てくれたりとか、患者さんになんか助けられたっていうか。(看護師 E2 頁)</p>
理論的 メモ	<p>・自分の成長を見守ってしてくれる患者の存在が励みになっている。患者からの成長の承認だけでなく先輩看護師からの承認も同じ。</p> <p>・成長したことを上司や先輩看護師から言語で伝えられることで自分自身でも成長を自覚することができている。成長しているということを承認されることで自己効力感が生まれ仕事へ向き合う励みや次への自信へつながっている。「できることを増やす」看護師の努力の上にこの動きがあるが「仕事ができない自分に悩む」から一歩抜け出せたのではないかな。このまま承認を感じなければ「仕事ができない自分に悩む」続けた結果、離職に至るのかもしれない。</p> <p>・すべての看護師に 1 年目の終わりに新人看護師に承認の機会はあるのか。言葉でははっきりと伝えられなくても認められていると自覚している例もある。</p>

9. カテゴリー生成、結果図

- ①概念生成をしながら、メモに概念間の関係を手書きで書いていった。同じヴァリエーションが入っている概念名もあり、それぞれどちらを意味することなのか検討しながら概念の検討(生成・統廃合)を繰り返した。
- ②最初は、カテゴリーを生成する際、複数の概念から実際にカテゴリーの関係性を説明できるかどうか、文章と図を同時に書きながら検討した。
しかし、SV によりカテゴリーをすべて階層化していて概念一つひとつの意味よりも自分自身の解釈を優先して考える傾向であったことに気づいた。結果図が他の質的研究と同じまとめ方になっていて M-GTA の分析方法から離れてしまっていた。SV をもとに分析をやり直し、認知⇒判断・思考⇒行動を考えながら図に表して検討を行い 37 概念から 5 つのカテゴリー(最初の分析テーマの時は 47 の概念から 9 のカテゴリー)を生成した。
- ③関係をみていっても重要な新しい概念、カテゴリーの解釈が出てこない状態(理論的飽和化)まで分析を継続したあと、図を描きながらカテゴリー間の関係を検討した。(再分析を行ったため 5 人分のデータ)
- ④カテゴリー間の関係性とプロセス性について結果図に示し、ストーリーラインを書いた。図を書く

きながら、②をふりかえり、カテゴリーの説明(定義)とプロセスの流れに矛盾がないかを確認しストーリーラインを書いた。

10. ストーリーライン

就業継続のプロセスとして、37 概念、5 カテゴリーを見出した(以下、カテゴリーを【 】とする)。

看護師は就職して【現実に向き合いできることを増やす】中で【仕事ができない自分に悩む】。行きたくない、辞めたいという【感情をコントロールする】中で【現実に向き合いできることを増やす】ことを続けた結果、患者や先輩看護師から承認され【チームで働く中で看護を深める】ことで職場での仕事ができるようになったと自分自身で認識できるようになっていた。そして、看護師としての経験を蓄積しながら【将来の自分を模索する】というプロセスがあった。

11. 理論的メモ・ノートをどのようにつけたか、またいつ、どのような着想、解釈的アイデアを得たか。

現象特性をどのように考えたか。

- ・①～④の分析プロセスの中で思い浮かんだことをメモに取り、現象特性とプロセスの流れ(行動)との関係を考えて。思いついたことはとにかくメモを取り読み返した。継続的比較分析を行う中で、最初の着想やアイデアなどを忘れてしまっていることがあり、定期的にメモを見直すことや考えに行き詰ったときにメモに戻るとヒントがあった。また既知のことの中に新たな発見はないか常に考えた。

12. 現象特性

- ・現象特性として動きの矢印にどのようなことが起こっているかを考えた。
- ・看護という仕事ができず、周囲に認められたいと一人で必死に仕事を覚えるうちにチームの中の一員として仕事という看護ができるようになっていく。自分自身も先輩看護師となり、自分にとっての先輩看護師が同僚という存在に代わる。その職場の中で認められたという認識が働く意欲を向上させる。3 年目は自分自身が周囲から承認されチームの一員として認められていると感じる「一人前」の看護師となる通過点で 4 年目で自信を深め、その後、それぞれの働き方を選択していくのではないかと。4 年目の語りからは自分ができるようになったという語りが多かった。どの道(キャリア)を選択しても 3.4 年の経験があれば新人の時のように困ることは起こらないのではないかと。
- ➡ 3 年の間に看護という仕事に自信をつけた看護師は、就業を継続でき、5 年目終了時点が就業継続のターニングポイントとなる可能性が高い(看護職は 5 年以降も継続する)。

13. 分析を振り返って、M-GTA に関して理解できた点、よく理解できない点、疑問点など 理解できた点

- ・人間の行動(認知⇒判断・思考⇒行動)を常に考えながら分析をすすめていく必要がある。
- ・概念生成からストーリーラインまでの多重的同時並行性。理論メモが後になってとても重要である。

よく理解できていない点

- ・研究テーマを明確にして何を明らかにするのかという視点で分析テーマの設定しなければ結果が全く異なる可能性もある。分析テーマが違っていると生成される概念名ももちろん違う。分析テーマの設定が難しい。
- ・結果図の表し方、人間の行動を予測できる結果図になっているか、応用者の視点で実践に応用できる結果図となっているかどうか現在もストーリーラインと合わせて見直している。

14. スーパーバイザー・会場からの質疑応答(Q 質問、アドバイス、A 返答)

〈研究背景動機について〉

Q1. 3年目の離職率が高いことに注目したのはなぜか

A1. はじめは新人看護師の離職率に注目していたが調べていくうちに3年目の離職率が高いことに気づいた。以前は、結婚などのライフイベントのため3年、5年の離職率が高いのは当然のこととして考えられていたが現在は晩婚化の影響もあり、先行研究からも3年目までの退職に職場内での人間関係が影響していると考えた。また、3年目まで各医療機関において「一人前」までの段階別の教育プログラムが組まれており、3年以内の退職はそのプロセスを中断することになる。そのため、3年は就業を継続してほしいと思う、自分自身の現場での願いから3年就業継続という点に着目した。

Q2. 研究タイトルにある職業継続意欲に及ぼす要因を抽出したいのか、3年間仕事を継続できたのはなにがあったのか、どちらを明らかにしたいのか、研究目的としてどう考えているか。

A2. 3年継続のプロセスを明らかにすることが研究の目的で、そのプロセスをみれば3年就業継続できた要因やその後の職業継続意欲へ及ぼす要因も抽出できるのではないかと考えた。8割の看護師は辞めたいと思いつつも就業継続できている。辞めたいという思いを乗り越え継続できたプロセスも明らかにしたいと考えた。

Q3. 新人看護師が専門職業人として3年で自立していくと考えれば4年目の看護師はどういう能力を備えていると認識しているか。4年目の看護師の持つ能力としてクリニカルラダーなど指標となるものを提示したほうが良い。

A3. 管理能力、自ら考えて行動できる能力など Patricia Benner(2005)の「意識的に立てた長期の目標や計画を踏まえて自分の看護実践をとらえ始める」ことができる実践能力をもっていると考え。またその職場での一通りのことを経験している。日本看護協会が出しているクリニカルラダーのレベル3がその段階の指標となると考えている。

Q4. 「神話」という言葉の使い方について「社会通念的に人々が大方のことについてそうだと思っている、しかしそれは、本当のことにように思っているが真実ではない」ということが神話とすると、3年神話という使い方、「3年たつと辞める」と検討したほうがよい、「神話」は正しいことを意味することではない、という意味があるため、用語の定義など言葉の使い方が正しいか考えたほうが良い。

A4. 「3年神話」という言葉は存在していなかったが本研究により、その説明ができるのではない

かと考えた。3 年にこだわるのが大切かどうか、人それぞれに習得期間やその後の職業継続に違っている点が研究を進めていくうちに結果として出ている。習得期間は違うが 3 年のうちには経験していると考えている。「3 年神話」の言葉の定義については検討したい。

Q7. 「一人前」とする定義をして分析対象者、分析データの絞り込みをしたほうが良い。

〈分析焦点者の絞り込み～分析テーマの設定〉

Q1. 3 年とこだわる理由があるのか

A1. 3 年としてしまうと、「一人前」の途中という結果で、4 年以降に仕事ができるというデータが出ている。3 年とする必要はないのではないかと自分自身も思っている。

Q2. 「仕事ができるようになっていく」という分析テーマは大きいのではないか

A2. 「仕事ができるようになったのはいつくらいか」という質問を行っているため、その時期はわかる。3 年では自信を持てなかったが 4 年では自信を持てるようになったという語りがあった。

Q3. ベナーの達人のエキスパートは 5 年ではないか、「一人前」という言葉をつかってないのではないか、能力をさしているのではないか、文献を確認してみたほうがよい。クリニカルラダーという介入がなされていることを考えて、一定の能力を有しているというところで分析焦点者を設定したほうがよいのではないか。

A3. ベナーの 2～3 年を「一人前」の定義として多くの先行研究が行われている。3 年目までは年次別の教育を受けているためレベル 3 の段階と思い、対象者へその確認をしていなかった。ベナーの「一人前」の定義によらず、看護師が仕事を覚えて一人前の割り当てられた仕事ができるようになったという認識が持てるまでのプロセスを明らかにするということを明確にする必要があると感じた。

Q4. 「一人前」になっていくプロセスを明らかにしたいのか、それとも 3 年以内に辞める人がいる中で辞めないで続けていけるのはなぜなのかを知りたいのか、それともイコールなのか。

A4. イコールとして考えている。辞めずに働き続けるプロセスの中に看護師として働いていけると自分自身が思えて仕事を継続していけるプロセスもあるのではないかと考えている。

Q5. 看護師の職業的なアイデンティティなどもプロセスの中にあらわれているのではないかと考えると、データに沿って、研究テーマと分析テーマを見直してもよいのではないか。

A5. 自分自身がこの研究で明らかにしたいことはないかをあわせて再度検討していきたい。

〈概念生成からストーリーライン〉

Q1. 他者からの承認が就業継続意欲につながっている、外発的な動機付けになる。

A1. 「承認が自信につながる」は「承認が自信になる」までの自己評価が行えていないため、「自信になる」問う概念名にはしなかった。

Q2. 看護師ならではのプロセスはどこか、専門職の中でも看護師が他と違う点は何か。新人のキャリア形成という点で一般化できる点は何かあるか。看護としてのオリジナリティが大切ではないか。

A2. チームで働く中で看護を深めるという点を看護師ならではの、という点と考えている(それ以外に何かがあるはず)。新人看護師はキャリアという点を考えられず必死に働いているのではな

いかと考えていたが、「ファーストキャリア5年志向」という概念がでてきた。方法論的限定性というところで対象者が大卒であったこともこの概念に影響をしているかもしれない。今後、データを増やして一般化していきたいと思っている。

Q3. チームといっても看護チームや、多職種チームがあり、熟達していく中で看護師の立ち位置や役割も変わってくるため拡大していく部分が見えていくのではないかと。辞めない思考になるが終点になると、仕事を続けることのみに着目していると感じるので、看護師の成長がこの中に現れるとよい。

Q4. 看護師の観察力や、クリティカルシンキングなど分析を見直すとオリジナリティがあるのではないかと。

A4. 4年目の語りには、観察力やフィジカルアセスメント力を上げたいというものがあつたため、分析テーマを3年とするのではなく、4年目までのデータをもう一度見直して分析していきたいと思う。

Q5. 「失敗と成功の中での習得」という概念で何をというところを明確にしていくことで、より、リアリティが出てくるのではないかと。

Q6. 結果図から相互影響性、インターラクティブ性はどう考えるか。影響の方向性を考えて概念をもう一度見直してみてもどうか。就業継続意欲に影響するものが結果図から見とれば現場で活用できるのではないかと。丁寧に見直してみてもどうか。

A6. 3つ目のインターラクティブ性でこの結果を活用するのは現場での師長などの管理者、指導に当たる看護師であると考えている。影響を及ぼす概念について丁寧に分析していきたい。

Q7. 分析ワークシートの対極例について、自信につながるのではなくプレッシャーにつながるデータはなかったか、結果図に示されている概念間の関係以外の動きや広がりがあるのではないかと。

変容のプロセス、どのような要因に影響を受けて、動きの循環の中で専門職業人として成長していくか考えてみたほうがよい。

A7. ご意見をもとにもう一度、丁寧に分析していきたい。

15. 研究会での発表を終えて

研究会において多くの貴重なご意見、ご質問、ご指導をいただき、本研究会の先生方、ご参会の皆様へ深く感謝申し上げます。スーパーバイズをしていただいた長山先生には、準備の段階から多くのご助言と丁寧な説明をいただき心よりお礼申し上げます。先生のご質問からすでに明らかになっている多くのことの中で自分自身がこの研究を通して何を明らかにするのかというところを再度、見直すことができました。また、分析方法では、概念生成や結果図、ストーリーラインについて、例を挙げながらM-GTAの特性を理解しやすい言葉で説明していただきました。そして発表の際には、私自身がとても緊張していたため質問に答えることに一生懸命で問いの意図を理解しきれていなかった部分があったのですが、録音した内容を聞くと問いの大切なポイントが長山先生によりまとめられていて分析についての理解を深めることができました。多くのご支援ありがとうございました。

た。

臨床の現場で18年勤務し、大学院で学ぶ中で、M-GTAという研究方法に出会い、木下先生の著書を何度も読み返しながら研究会に参加する中で少しずつ理解を深め研究を進めていました。そして今回の研究会での発表やその後の懇親会でのご助言により、理解が難しかった部分をまだまだ不十分な点はあるのですが理解を深めることができたように思います。木下先生のご助言から私の研究テーマは、多くのプロセスを含んでいるため複雑化しているということも理解できました。分析テーマを再検討し、4年目までのデータで再度分析を行っていきます。本研究が看護の現場に還元できるように、いただいた貴重なご意見をもとに1月の修士論文提出に向けて取り組んでいきたいと思います。このたびは研究会での発表という貴重な機会をいただき本当にありがとうございました。

〈引用・参考文献〉

- Patricia Benner(2005) ベナー看護論新訳版, 井部俊子訳, 医学書院
- 大江真人・塚原節子・長山豊他(2014) 新卒看護師が職業継続意思を獲得するプロセス 日本看護科学会誌 Vol. 34 No. 1 p 217-225
- 小野五月・山崎律子・山田弘美(2015) 3年目から5年目看護師が仕事を継続していくために大切に思うこと: テキストマイニングによるインタビューの分析から 日本看護学会論文集, 看護管理 45, 228-231
- 勝原裕美子(2007) 看護師のキャリア論, ライフサポート社
- 亀井葉子・青山ヒフミ他(2009) 先輩看護師が認識する一人前看護師の能力 日本看護学会論文集 看護管理 40, 249-251
- 木下康仁(2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂
- 木下康仁(2007) 『ライブ講義 M-GTA』弘文堂
- 工藤真由美・亀岡智美(2015) 臨床経験 5 年未満の看護師の教育ニーズとそれに関係する特性: 臨床経験年数別の分析を通して 看護教育学研究 24(1), 85-100
- 厚生労働省, 第1回看護職員需要供給見通しに関する検討会 資料3-1, 2014年12月1日
- 佐藤真由美(2010) 新卒看護師の成長を促進する関わり, 日看管会誌 14(2)
- 佐藤真由美(2015) 新卒看護師の社会化を促進する関わりモデルの検証 日本看護科学会誌 Vol. 35 p. 67-276
- 関井愛紀子(2010) 新人看護師の勤務継続意欲に関連する職場環境, 新潟医学会雑誌 120(9), 501-510
- 高瀬美由紀・井場ヒロ子・藤井宝恵他(2014) 新卒看護師の看護実践能力とその向上度が離職意思に与える影響 日本職業・災害学会誌 63(1)
- 高橋満(2012) 看護の力をどのように育むのか 東北大学大学院教育学研究科研究年報第60集 第2号
- 日本看護協会 2015年病院看護実態調査結果速報
- 畔柳あゆみ・近藤暁子(2013) 卒後1~3年目看護師の自己教育力、仕事意欲の比較 日本看護学会論文集 看護管理 43, 79-82
- 真壁幸子・木下香織・古城幸子(2006) 職業経験5年以内の看護師の早期離職願望と仕事への行き詰まり感 新見公立短期大学紀要 27, 79-89
- 松岡聖子(2013) 新人看護師が一人前の看護師として成長する過程において自己教育力を育むための支援につ

いて：卒後2年目看護師を中心に 看護教育研究集録. 教員・教育担当者養成課程. Reports of nursing research (39), 147-152

松下由美子(2004) 新卒看護師の早期離職に関わる要因の検討, 山梨県立大学紀要 Vol6, 65-71

渡邊里香・荒木田美香子他(2011) 若手看護師における退職の予測要因の検討 日看管会誌 Vol. 15, No. 1

【SVコメント】

長山 豊（金沢医科大学）

河本さんの研究は、新人看護師が一人前に育っていく過程で、様々なプレッシャーに押し潰されて離職するのを何とか防げないのかという現場の課題より生じた価値あるご研究だと思います。河本さんは研究テーマにとっても熱意をもって取り組まれておられます。河本さんとの研究会前のやり取り・当日のディスカッションを通じて、ご自身の考えを積極的かつ丁寧に言語化しようとする姿勢をもっておられ、研究者の関心に関する説明力に私自身も非常に刺激を受けました。

河本さんの研究的関心の核心は「3年間看護師としての臨床経験を蓄積することにより、（その後、たとえ現在の職場を辞めたとしても）看護職としての職業継続意欲を持ち続け、どのような看護の職場にも適応することができるのではないか」という視点にあると、私は受け止めました。河本さんが最も悩んでいた点は、分析の終点だと思います。ご発表時の分析テーマで「看護師として働くことができるようになっていく」という「うごき」を示されていますが、「看護師として働く」では様々な意味内容が幾重にも広がって解釈され、概念間の関係性を検討する上で収束化に向かうことが困難になると予測されます。看護師として働くことができるようになっていくという現象には、その臨床現場で求められる看護実践能力（スキル）の水準を満たすように変化していくプロセスと、同時に臨床現場で相互作用の対象となる人々との関わり方（人間関係・コミュニケーション）をどのように変化させていたのかというプロセスが関係し合っています。そして、河本さんが生成された結果図の後半の概念では、分析焦点者が医療チームの中で自分自身の役割や立ち位置をみつけて一人前の看護師に近づいていく一方で、看護という仕事に今後どのようなスタンスで向き合っていけばよいのか模索する姿も描かれているように感じました。分析焦点者の終点の姿として、専門職業人として周囲に信頼され自立し始めるのと同時に、専門職業人としての自己の在り方を問い始めていたとすれば、看護師としての自分なりの仕事への向き合い方を形成するプロセスが結果図全体に表現されていくように思います。河本さんの関心のある「職業継続意欲」や「職場適応」に関する変化は、データの中から概念化されて浮かび上がってくるのではないのでしょうか。

中核となる「うごき」を見定めることは非常に大変な分析作業だと思います。4年目の看護師として現在も臨床現場で看護という仕事に向き合っている分析対象者の視点に立ち、これまでの臨床現場で触れ合う人々との相互作用をどのように変化してきたのか、なぜ臨床現場へ適応できたのか、看護師としての今後のキャリアをどのように見据えているのか、データに戻って丁寧に解釈して

説明しようとすることで、分析焦点者の変化に影響する転換点がみえてくると思います。河本さんのご研究は、看護師だけではなく、専門職として多様な次元での社会化が求められる他の専門職にも応用可能な結果であると感じております。ぜひ、修士論文として実りある研究におまとめになることを祈っております。ありがとうございました。

【第3グループ】

吹原 豊（福岡女子大学）

Yutaka FUKIHARA : Fukuoka Women's University

大洗コミュニティの移住労働者の日本語習得過程

Japanese Language Acquisition Process of Indonesian Migrant Workers in Oarai Community

1. 発表レジメ

1) 研究の背景および目的

本研究は、「移住労働者の日本語習得研究:あるインドネシア人コミュニティでの調査から(仮題:現在博士論文として執筆中)」という研究の重要な一部を成すものである。

第二言語としての日本語習得の研究は1970年代以降活発に行われてきているが、ブラジル人移住労働者に関する研究など少数の研究を別として、その大半は日本語学校、専門学校、大学などの教育機関に所属する者を対象としている。しかし、昨今は教育機関で日本語教育を受けることのないまま日本社会の一員として生活し、就労する外国人が急増し、今後も増加し続けることが予想されている。そのため、こうした移住労働者の日本語習得の実態を明らかにすることは喫緊の課題であるといえる。

報告者は、2005年から共同調査者(首都大学東京国際センター教授 助川泰彦氏)とともに、茨城県東茨城郡大洗町(以下、大洗町)とその近郊に集住して主に非熟練労働の現場作業に従事するインドネシア人を対象として日本語能力についての探索的な小調査(以下、探索調査)を始めた。これは筆者と助川氏が、大洗町在住のインドネシア人の出身地である北スラウェシ州ミナハサ地方(以下、ミナハサ地方)にかつて居住し、日本語教育を行った経験を持つことをひとつの動機としている。また、奥島(2013)によると、日本に在住するインドネシア人数は主要国籍集団中第9位の25,543人にすぎないが、近年は技能実習生に加え、日系人労働者その他の労働者が増加しているという。しかし、少ないながらもその日本語習得に関して一定の研究成果があるブラジル人移住労働者と比べ(ナカミズ1996; 土岐他1998など)、インドネシア人移住労働者の日本語習得を対象とした研究は管見の限りきわめて少ない。そのことも本研究の動機となっている。

探索調査の対象者はすべて日本人が経営する水産加工工場ないしは農家で労働しており、現

場作業の下支えをする労働者として日常的に日本語で指示を受けて仕事をしている。調査の結果、大多数の者が「できれば日本語がもっと上手になりたい」と希望しているものの、現実のコミュニケーションでは、発話は単語を並べただけのものに限定されており、助詞を用いたり、正しい語形変化を行ったりすることができなかった。しかし、その一方で、この大洗町のキリスト教徒インドネシア人コミュニティ(以下、大洗コミュニティ)には、日本語教室にも通ったことがなく、日本語教材や辞書も用いない、いわば自然習得によってある程度正確な日本語を用い、中級以上のレベルに達していると思われる者がごく少数であるが存在することがわかった。

このような結果から、まず、研究全体の研究設問とそこから発生する研究目的を次のように定めた。

(1) 大洗コミュニティに属するインドネシア人移住労働者の日本語能力について客観的な指標を用いて調べる。

(2) 大洗コミュニティに属するインドネシア人移住労働者の言語使用について調べる。

そして、(1)と(2)を併せて行うことにより、大洗コミュニティに属するインドネシア人移住労働者の言語使用状況と日本語能力を明らかにする。

まず、上記の目的(1)に即して、コミュニティの全成員(約400人)の四分の一にあたる100人を対象に2007年9月から2008年1月にかけてOPI(Oral Proficiency Interview)(ACTFL: American Council for Teaching of Foreign Languagesが開発した、インタビューによる口頭能力テスト。第二言語学習者の口頭能力を初級-下/中/上、中級-下/中/上、上級-下/中/上、超級の10段階に区分して評価する。)を実施した。OPI調査への協力者は、インドネシア人キリスト教会での信者に対するアナウンスや、信者から信者への口コミを通じた協力呼びかけにより募った。そうして集まった協力者100人あまりに対しOPIを実施し、正しく判定ができた100人のデータをOPI調査の全体データとした。

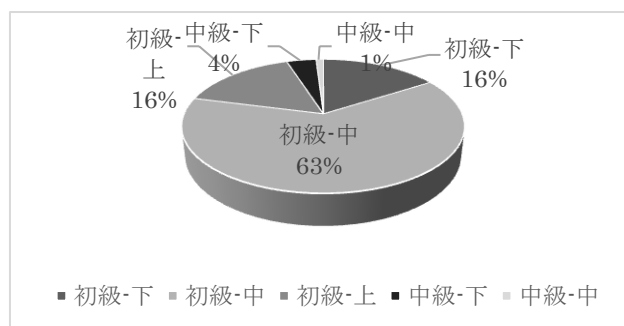


図1 OPIレベル別の割合

結果として、100人の日本語口頭能力の内訳は、中級がわずか5%であり、残りの95%が初級の範囲内であった。また、初級の中でも63%が初級の中のレベルであった。

OPIによる調査の結果、平均しておよそ7年の滞日期間があるものの大多数(95%)が初級レベルにとどまっている実態が明らかになった。しかし、その一方でごく少数(5%)の者は、何らかの経験を経て、職場や日常生活の面で必要最低限のことしかできないという問題から解放されていることが

わかった。彼らのような中級到達者がどのようにして中級話者になっていったのかについて調べることにより、「できれば日本語がもっと上手になりたい」と思いながらも果たせないでいる大多数の初級話者に、問題を乗り越えるための一つの道筋のようなものが示せると考えた。また、学習を学習者と学習環境の相互作用とする立場(文野ほか 2004)からすれば、いったいどのような環境が整えば言語の習得が進むのかについて明らかにすることには意義があると考えられる。そこで、本研究においては、大洗コミュニティの日本語中級話者を直接の調査対象とし、彼らが滞日期間を通して日本語中級話者に到達したプロセスを明らかにすることを目的とした。

2) M-GTA に適した研究であるか

M-GTA の創案者である木下(2003 : 89-90)は、M-GTA を用いて分析するのに適した研究として、「人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用に関わる研究であること」、「領域としてはヒューマンサービス領域が適していること」、「研究対象とする現象がプロセス的性格を持っていること」を挙げている。本研究の主要な目的は、大洗コミュニティのインドネシア人移住労働者が日本語中級話者になっていったプロセスを明らかにすることである。そこには大洗コミュニティの主たる成員である「インドネシア人移住労働者」とホスト社会の成員を中心とする「関与者たち」との社会的相互作用が存在している。また、主に労働場面に限定されているものの、共通言語としての日本語を介した職業教育やそれに付随する日本語指導が行われている領域を扱っている。さらに、どのような要因によって日本語習得が促進されるのかについて知見を得ることにより、〔自助〕、〔共助〕、〔公助〕のレベルでどのように環境を整備し、どのように働きかけを行うのかについて、現場に還元可能な取り組みにつなげることができる。以上のことから、M-GTA による分析に適したものであると判断した。

3) 分析テーマ(絞り込みの過程も含む)

当初は、OPI の結果日本語中級話者であると判定されたインドネシア人移住労働者の日本語習得の促進要因を探ることを目的としてインタビューを計画し、分析テーマについても「日本語中級話者の日本語習得の促進要因」としていた。しかし、M-GTA について学んでいくうちに、この手法はプロセス的性格を持っている現象を研究対象とするものであるということに気づいた。また、大洗コミュニティの成員の〔自助〕、〔共助〕、〔公助〕のありようについて見ていくうちに、この研究で明らかにすべきなのは、現在、日本というホスト社会において、職場や大洗コミュニティ内をはじめとする複数の実践コミュニティ内で十全的参加者(レイヴ&ヴェンガー 1993)たりえている人々がホスト社会との媒介物の中でも最も重要な日本語をどのようなプロセスを経て習得していったのかについてなのではないかと考えるようになった。前出の文野(2004)の言葉を借りて言い換えれば、日本語中級話者が自らを取り巻く(学習)環境とのあいだでどのような相互作用を経て現状に到ったのかについて明らかにすることが必要であると考え、分析テーマを「日本語学習リソースに恵まれない移住労働者が日本語中級話者になっていくプロセスについての研究」(日本語学習リソースについては、国立国語研究所(2004)による、「言語学習リソースとは、教育や学習に用いられ、これらの

活動を支えるものごと(モノ・ヒト・コト)」という定義の「言語」を「日本語」に読み替えてとらえる)とした。

しかし、その後 SV の指摘を受け、「日本語学習リソースに恵まれない」という部分について再検討した結果、日本語中級話者は確かに教室学習の機会や市販の教材には恵まれていなかったものの、仕事を通じた日本語学習を行ったり、上司や同僚との交流を学習リソースとして活用したりしていることがわかった。そのため、「日本語学習リソースに恵まれない」の部分进行削り、さらに対象者が全員インドネシア人移住労働者であること、大洗コミュニティがインドネシアのマイノリティであるミナハサ族のキリスト教徒によって構成されている結びつきの非常に強いコミュニティであることから、分析テーマを「大洗コミュニティのインドネシア人移住労働者が日本語中級話者になっていくプロセスの研究」とした。また、分析焦点者は「大洗コミュニティのインドネシア人移住労働者のうち日本語中級話者になっている人」とした。しかし、M-GTA によって実際に生成された概念を見ると、必ずしも「大洗コミュニティのインドネシア人移住労働者独自のもの」が見いだされたわけではなかった。そこで、再度分析テーマに検討を加え、分析テーマを「日本語学習リソースへのアクセスが困難な移住労働者が日本語中級話者になっていくプロセス」とし、分析焦点者を「日本語学習リソースへのアクセスが困難な移住労働者のうち日本語中級話者になっている人」とした。そうすれば、広義の日本語学習リソースが存在しても一般的にはそれを活用できていないことが明らかにできると考えたからである。

以上に加えて、分析テーマのプロセスのスタートは中級話者が渡日し、就労を始めた段階であり、ゴールは中級以上の話者になった段階であるとする。

4) インタビュー項目

まず、OPIで中級話者であると判定された5人に対して、判定結果を知らせ、全体の中で5%のレベルに入っている(相対的な上位者である)ことを伝えた。そして、どうしてそのようなレベルに達したのか知りたいのでインタビューに協力してほしい旨を伝え、インタビューでは日本語の勉強法やいつどこで誰と日本語で話すのか、日本に来てからどのように仕事をしてきたのかについて知りたいということも伝えた。

実際のインタビュー時には、まずどうして日本語を上達させたのか、思うところを話してほしいと伝えたが、(人によって違うものの)そのままではさすがに流暢な語りが聞けるというわけにはいかなかった。そこで概ね以下のようなことを確認していった。

- 日本に来たのはいつか？
- どうやって仕事を見つけたか？
- 仕事のやり方をどのようにおぼえたか？誰に仕事を教わったか？(教わったのが日本人の場合)どのようにコミュニケーションをとったのか？
- どうやって日本語を学んでいったのか？
- 転職の経歴について
- 会社内(同じ作業場内)の日本人、インドネシア人、その他の外国人の割合と言語使用について。

- 日本人の同僚との交流について。仕事以外の付き合いがあったか？
- 日本人の友人の有無と交流について。
- 大病の経験など、日本での大変な経験と、そのときのコミュニケーション上の問題の乗り越え方
- 今でも日本語の問題があるか？どんなことか？ ＊以上は、追加データ分の2人に関しても同様である。

5) インタビュー協力者の概要

表1 中級レベル7人(網掛け部分の追加データも含む)のデータ (水:水産加工業、工:工場労働、農:農作業)

仮称	性別	年齢	滞在年数	学歴	日本での職歴	OPI判定
MJ	男	30代	10年	専門学校中退	水—水—工(溶接3社)—工(ゴムプレス)— 水—工(PC基盤)—水	中級-下
MS	男	30代	9年	大学中退	水—水—野菜加工—水	中級-中
DD	男	30代	12年	高卒	水(5社)—農—現場(空調設備2社)	中級-下
PS	男	30代	11年	大卒(3年制)	水(3社)—製菓—工(ダイナモ制作)	中級-下
TM	男	30代	11年	高卒	水(3社)—現場(型枠)—現場(塗装2社)	中級-下
IA	男	30代	6年3ヶ月	大学中退	農業—野菜加工—(現場でのアルバイト)— 野菜加工	①初級-上 ②中級-下
KR	男	30代	3年4ヶ月	大卒	水—野菜加工	①初級-中 ②中級-下

インタビューの所要時間は1人あたり1～2時間で、インタビュー時の使用言語はインドネシア語のほか、相手によって日本語だけで、あるいは、インドネシア語に日本語を交えて行った(MS、PS、IA、KRの4人に対しては内容の確認などの理由で2回以上のインタビューを行っている)。インタビューは、調査対象者の許可を得たうえでICレコーダーに録音したのち、すべての音声を文字化した。その際、日本語はそのまま文字化し、インドネシア語に関しては、劉(2014)に倣って、聞き取ったインドネシア語の音声を日本語に翻訳したうえで逐語録を作成し、データとした。

6) 概念生成までの手順

具体的な分析展開について以下に述べる。まずは、下準備として、ベースデータ5人分の逐語録を横断的に読んだうえで、データのディテールが豊富で一番分析テーマに合っていそうな逐語録を選び出した。①まず選び出した逐語録の中で、「日本語学習リソースへのアクセスが困難な移住労働者が日本語中級話者になっていくプロセス」という分析テーマに関連のありそうなデータ部分を1つ選び、分析ワークシートの「ヴァリエーション」欄に書き込んだ。②ヴァリエーションの意味を十分に解釈し、その解釈を定義として文章化して「定義欄」に書き込んだ。③定義を踏まえ、それよ

りコンパクトでインパクトのある概念名を考え、「概念」欄に書き込んだ。④定義・概念名と照らし合わせて類似と対極のヴァリエーションを探し、比較検討のうえ、類似のものを「ヴァリエーション」欄に書き込んだ。⑤④を繰り返す過程で、必要に応じて、定義と概念名に修正を加えた。⑥④～⑤の過程で、対極、例外的なヴァリエーションの抽出との比較検討も実施し、関連する分析ワークシートの「理論的メモ」欄に記載するか、新たにワークシートを作成して概念生成を試みた。このようにして生成した概念については、大洗コミュニティの会員についてその背景も含めて最もよく知る助川氏にスーパービジョンを受け、概念名の修正を行ったり、理論的メモを加筆したりした。

第一回の OPI からおよそ 1 年後に、第一回の対象者のうち当時茨城大学の日本語教室に定期的に参加していた 10 人を対象に実施された第二回の OPI において、新たに中級話者であると判定された 2 人のデータを追加データとして加えた(表 1 の IA と KR)。追加データは、すでに生成途中の概念をさらに精緻化するうえで、類似と対極の方向でヴァリエーションを探していくための材料として活用した。そして、再度概念の検討を行ったほか、概念名の修正を行ったり、理論的メモを加筆したりした。

以上の過程を経て、全部で 17 の概念が生成された。

7) 生成された概念

生成された概念は以下の 17 である。

①[英語など使える媒介の活用]、②[水平的人間関係の中での学び]、③[日本語漬け状態の経験]、④[間違いを直してくれる日本人の存在]、⑤[書き言葉の壁に挑む]、⑥[日本人とのつながりと日本社会での居場所の存在]、⑦[日本語でサバイバルできる自信]、⑧[やりがいと自己効力感による学びの促進]、⑨[日本語の大切さの自覚]、⑩[日本語能力の利他的な活用]、⑪[質問して、理解して、おぼえて、使う]、⑫[共通言語としての日本語の使用]、⑬[努力で壁を越える]、⑭[来日 1 年後ぐらいまでの努力]、⑮[翻訳的理解から日本語による理解へ]、⑯[自分でがんばる]、⑰[理解可能なインプットへの修正]

8) 分析ワークシート(配布資料参照)、結果図(配布資料参照)

9) ストーリーライン

日本語中級話者のプロセスは《**場・努力・自己効力感による学びの好循環**》のそれである。

スタートは来日して、職場という実践コミュニティにアクセスした時点である。そこで、[水平的人間関係の中での学び]を経験したり、[間違いを直してくれる日本人の存在]に恵まれたりする。また、[日本人とのつながりと日本社会での居場所の存在]を土台に、仕事上で大量でありかつ多様な日本語に触れ、[日本語漬け状態の経験]をする。また、そこでは日本人だけではなく、他国からの移住労働者も含んだ[共通言語としての日本語]によるやりとりも経験することになり、【**学びをもたらす場の生成**】がなされていく。

この【**学びをもたらす場の生成**】というのは、とりかかりは偶然によるものだとしても、その偶然を生

かすための努力が関わってくる。中級話者の場合、言語コミュニケーション上の問題があっても、問題解決の中心にあるのは**【自分でがんばる】**ことである。そして、**【来日 1 年後ぐらいまでの努力】**によって、非熟練労働の作業に関してはある程度対応可能な日本語を習得し、その後、転職などで作業内容が高度化しても、たとえば、**【書き言葉の壁に挑む】**などの自助努力で乗り切っていく場合が多い。つまり、大小の**【努力で壁を越える】**経験によって、中級話者として必要な日本語能力を身につけていく。

そして、その**【努力で壁を越える】**経験は、**【日本語でサバイバルできる自信】**のもととなる。自らの日本語能力が職場や大洗コミュニティ内で活用できること（**【日本語能力の利他的な活用】**）を経験し実感することによって、**【やりがいと自己効力感による学びの促進】**がなされる。また、日本語を上達させた者であるがゆえの**【日本語の大切さの自覚】**に到る。そのことから**【自己効力感による動機づけ】**がなされることになる。そして、それは中級話者を、再び新たな**【学びをもたらす場の生成】**へと導く。このような循環を繰り返しながら当面のゴールである日本語中級話者へと移行していく。

このような一連のプロセスを構成する**【学びをもたらす場の生成】**、**【努力で壁を越える】**、**【自己効力感による動機づけ】**のすべてに関わるのが**【学びの方略】**である。中級話者は**【英語など使える媒介の活用】**や（わからないことがあったら何でも）**【質問して、理解して、おぼえて、使う】**ことや、**【理解可能なインプットへの調整】**などを行いながら学びの好循環を支えている。それと同時並行的に、通常は職場の先輩インドネシア人にインドネシア語で説明を受けるなどの段階から日本人上司から日本語で指示を受けるなどの**【翻訳的理解から日本語による理解へ】**と移行していく。

10) カテゴリー生成および結果図の作成 (配布資料参照)

概念を生成しながら、生成した概念同士の関係について見ていった。概念間の関係はノートに略図で書いて、検討した。その結果、概念間のまとまりが見えてきたので、それをカテゴリー候補とし、分析テーマに照らし合わせてカテゴリー名を考えた。それと同時にカテゴリー間の関係も検討し、それが最終的な分析結果のどの部分にあたるのか、プロセスのどのような「うごき」の説明になるのかを考えながら結果図を作成した。

11) 理論的メモをどのようにつけたか

分析テーマに照らし合わせた結果、ヴァリエーションとして初めに挙げられた事柄になぜ注目したのか、また、ヴァリエーションが増えるに従い、当初の定義や概念名がどのように変遷していったのかについて記載することを意識して理論的メモをつけ始めた。しかし、何度かの中断を挟み、途中からは概念生成の際に頭に浮かんだアイデアや博士論文の先行研究との比較によって得られた知見なども書き込むようになってしまい、メモの内容が分析ワークシートで挙げられたヴァリエーションからかけ離れた内容になってしまった。その後、SV からの指摘を受け、概念生成に到るまでの分析プロセスの記録をデータにグラウンデッドな視点から記載するように意識して、記載内容の加筆修正を行った。

12) 分析を振り返って

M-GTAを使った初めての分析であったため、すべてが難しかった。分析期間も何度かの中断を挟み、1年半ほどにわたってしまい、何度もあきらめそうになった。最大の問題は分析テーマと分析焦点者がなかなか定まらなかったことであり、本研究会での発表担当が決まってからもSVの問いかけを受けながら何度も変更を行った。そもそもはすでに入っていた大洗コミュニティというフィールドで起こっている問題をどうとらえ、理解するのか。問題を解決するとしたら、どのような方策がありそうかというところから始まった研究であったため、分析焦点者を自分が現場で目の前にしている人のレベルからどこまで抽象化させて考えるのかというところで最後まで悩んだ。結局、インタビュー調査からM-GTAによって導き出された結果を見る限り、自分がこだわってきた「大洗コミュニティ独自の」がさほど見られなかった。そこで、分析焦点者を大洗コミュニティ成員に限定せず、「日本語の学習リソースへのアクセスが困難な移住労働者のうち日本語中級話者になっている人」に設定し、ようやく分析結果を導くことができた。本研究会とSVの都丸けい子先生にはただ、ただ感謝である。

〈引用・参考文献〉

- 国立国語研究所(2004)「これからの日本語学習支援を考える―学びを支えるモノ・ヒト・コト―」平成16年度国立国語研究所公開研究発表会資料
- 木下康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂.
- 木下康仁編著(2005)『分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂.
- 木下康仁(2007)『ライブ講義 M-GTA―実践的質的研究法』弘文堂.
- 土岐哲.研究代表者(1998)『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究』平成6年度～8年度科学研究費補助金.基盤研究. A.研究成果報告書
- ナカミズ・エレン(2008)「ブラジル人就労者における日本語の諸相」大阪大学大学院文学研究科日本学専攻博士学位論文
- 文野峯子ほか(2004)『日本語学習者と環境との相互作用に関する研究』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2) 課題番号 13680365 研究成果報告書
- 劉昊(2015)「外国人散住地域における在日中国人ニューカマーの「創造的教育戦略」」移民教育年報第21号, pp.139-156
- レイブ, J. & ウェンガー, E. 著 佐伯胖訳(1993)『状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加―』産業図書

2. 会場からのコメント概要

○分析焦点者から「インドネシア人」というところを外した判断の根拠について聞きたい。また、研究協力者はすべて20代で来日した男性だが、その部分を分析焦点者の設定に際し考慮に入れる必要はないのか。また、追加データに関しては「日本語教室に通っていた」とあるが、それでも「日本語学習リソースへのアクセスが困難」というように判断した根拠についても聞きたい。(以下は、この質問に関連したコメント)分析焦点者が「日本語学習リソースへのアクセスが困難な移住労働者のうち中級話者になっている人」となっているものの、実際の協力者は、30代(来日時20

代)、男性であるというときに、このままの分析テーマだと生み出す分析の結果としての理論の適応範囲は 30 代にも限定されないし、男性にも限定されないということを言っていることになる。方法論的限定の観点からいって、M-GTA による分析の結果としての理論はやはり 30 代の男性のインドネシア人の移住労働者に限定されないものになっているのかどうか確認が必要。

- 日本語中級話者というのはどのくらいのインパクトなのか確認しておく必要がある。たとえば、定期的に日本語を学習した場合どの程度で到達できるレベルなのか。
- 結果図の中でコアになる部分はどこか。そもそもの問題関心と今回の分析結果をどのようにリンクさせていけそうか。
- 結果図を見ると、既存の心理学的な構成概念を無意識に流用してしまっているように見受けられる。そのような場合、一定の領域での予測力や説明力を失ってしまうことがある。結果図を見ても量的研究の結果導き出されたような抽象的なレベルのものになっている。M-GTA でやるのであれば、この領域ならではの概念名やヴァリエーションになるよう再度見直していくことも検討したほうが良い。
- 学びというと人の頭の中(認知面)のみを見てしまいがちだが、M-GTA であれば、相互作用という(認知面以外の)感情、行動もひっくるめた部分をとらえていく必要がある。そのような部分がデータの中で見られると良い。
- 自習だけで中級になった人もいるのではないか。そうした事例があった場合、先入観にとらわれず概念にして良いと思う。
- 大洗のコミュニティの成員を対象にしながら方法論的限定を広く取る理由として、「大洗の移住労働者独自のものが見出されたわけではなかった」としているが、独自であるとしているものが何で、何をもってそれが見出されなかったとしているのかという点について具体的に聞きたい。
- この分析テーマについて、M-GTA でやる必要があるのかどうか疑問を感じる。大洗コミュニティには限定しないまでも、同じ社会文化的背景を持つインドネシア人が(日本国内の)同じ地域で集住しているという括りでもいいのではないか。
- 結果図を見ると、カテゴリーの中で概念が並列で並んでいるだけで、そこに「うごき」が見えてこない。たとえば【学びをもたらす場の生成】でいえば、概念間に何かしらの矢印があって、そのうえで、「生成していった」というのが見えてくるのではないか。今のままでは生成というのには納得できない。それに関連して、「あらゆる場面に【学びの方略】が関係するのではないかと」の考えで矢印を引いた」ということだが、語りの中から出てきていなければ矢印は引けない。カテゴリーの中で「生成されたこと」が表現されれば、そこに矢印が向いてもおかしくはない。
- この【学びの方略】というところは、「自分が日本語を学習するために、大洗のリソースをどう使っていくのか」ということだと思う。
- 同じ概念を形成するとされているヴァリエーションの中に、実は違う概念を形成するのではないかと思わせるものがある。
- ほんとうに「この人たちがいかにして日本語能力を獲得していったのか」というところを丁寧に見ていくとプロセス性が出せるのではないか。

○「大洗のインドネシア人移住労働者コミュニティならではのものは出なかった」ことの原因は、結果が一般化されすぎたものになっているからではないか。たとえば[自分でがんばる]にしても、なぜ自分で頑張らなければならないのかというところを見れば(他との)違いは出るはず。教える側としてもなぜ頑張るのかというところを知りたいわけなので、その部分は大切。(「…ならでは」の面について)出なかったというよりも見方を変えないと出てこないのも、是非にそのように取り組んでほしい。そうすれば、こちらが「ああ、このコミュニティではこういうふうになるからうちではこうかもしれない」というように予測が立てられると思うので。

○今回の協力者というのはトップランナーなのか。同じように 20 代で来日し、習得が進んでいない人にも同じようにインタビューをしてみることによって習得の条件が浮き彫りになりやすいのではないか。また、日本語を使わなくても生活できてしまうという環境もある意味充実してきていて、それが不十分だった時代の人には迫られて、必要度が高くて習得が進んだ可能性もあるのかもしれないと思った。

3. 感想

レジュメの中の記述の繰り返しになるが、M-GTA によるはじめての分析は非常に難しいものであった。特に、分析テーマと分析焦点者の設定が結果を大きく左右すると感じたが、それだけではなく、データの読み込みから、ヴァリエーションの選定、概念の生成、カテゴリーの生成に到るまでの継続的比較分析を丁寧に行うことの必要性を強く感じた。今回は分析焦点者を広くとらえすぎてしまったためもあり、結果が一般化されすぎたものになってしまった。もともとこだわっていた「大洗コミュニティ」の「ならでは」の部分が出ればよかったのであるが、インタビューの対象者(協力者)にとって「大洗コミュニティならでは」の部分というのは言葉にする必要がないほど自明なことであるため、語りの中にそれを見出すのは困難であるようにも思う。先に述べたように、今後は分析を再度丁寧に行うことはもとより、逐語録以外の参与観察等のデータも含めた分析を試みたい。

【SV コメント】

都丸 けい子 (聖徳大学)

1. 背景・目的と研究テーマについて

吹原先生の研究テーマは、「大洗コミュニティの移住労働者の言語習得過程」です。つまり、同一の環境下に生活する人々(大洗コミュニティに属するインドネシア人)の間に存在する日本語習得過程の差を、特に修得が上手くいった人々(中級レベルの能力に至った人々)の視点から描き出そうとするものです。それは、吹原先生ご自身が「大洗コミュニティ」というフィールドと長年にわたって関わる中で感じてこられた、当該コミュニティが内包している課題に関連するものでした。

2. SV の過程について

SV のやり取りとして初めに、本研究の背景と目的・意義について尋ねました。M-GTA に適した研究であるか否かについて検討していく上で、また分析テーマや分析焦点者について検討していく上で、土台となる情報です。吹原先生からは、即座に明確な回答をいただきました。研究の背景と目的・意義について記載された丁寧なレジュメから、今回の発表に至る以前に、既に多大な時間と検討を費やしてこられた研究であることがわかりました。

次に、分析テーマへの絞り込みの過程および分析焦点者について尋ねました。吹原先生は、投げかけた質問を丁寧に吟味してくださり、そのつど緩やかに分析テーマに修正を加えていらっしゃいました。この段階でのやり取りが、SV 中でもっとも時間を要しました。吹原先生にとって、悩ましく苦しんだ過程であったのではないかと思います。やり取りの焦点は、第1に「研究者は何をどこまで明らかにしたいのか」について考えていただくこと、第2に「(手元にある)データから何をどこまで明らかにできるのか」について考えていただくことの2点でした。この研究では特定の国の人々が形成した特定のコミュニティ1か所に焦点を当てており、コミュニティ内の特定の基準に該当する人々への面接調査を既に終了している点に留意する必要がありました。すると、第1の問いと第2の問いの折り合いに際しては、自ずと後者への比重が大きくならざるを得ません。これは、「分析テーマ」および「分析焦点者」の設定に関わるだけでなく、「研究テーマ」の中で当該の「分析テーマ」をどう位置づけるのかにも関わっていきます。

最後に、概念生成および結果図について尋ね、気がついた点をコメントさせていただきました。研究会までの期日が迫る中、分析ワークシートおよび結果図に関しては必要最低限のコメントのみに留まってしまった点は反省しております。なお、この段階でのコメントのキーワードは、継続的比較分析でした。

3. 研究会での発表を経て…

研究会では、先生方から非常に有益なコメントをいただきました。SV の過程でやり取りさせていただいたことや、研究会時にいただいたコメントを吟味していただき、本研究の分析が進みますことを、切に願っております。

◇近 況 報 告

(1) 氏名、(2) 所属、(3) 領域、(4) キーワード

- (1) 飯島 律子
- (2) 放送大学院
- (3) 家族介護
- (4) 介護者支援、脱家族、脱施設

私は今年、大学院に進み、家族を介護した経験から介護者支援の研究をしています。脱家族、脱施設という発想で、新しい介護のモデルを構想中です。12 日の研究会は大変刺激になりました。内輪のゼミと違い、深い思考と表現力が問われていました。特に始めの山田牧子さんの、スピリチュアルな支援は興味深く聞かせていただきました。日本では宗教を扱った研究は少なく、今回も批判されていましたが、宗教の力というものは、やはりあると思います。宗教は長い歴史を生き抜いてきたものであり、苦しんでいる人を救ってきました。現代は科学の時代ではありますが、目に見えない、言葉にできないものを伝える力があることを、ぜひ山田さんに発表していただきたいです。その際、宗教を具体的に表すことが必要だと、木下先生がおっしゃっていました。私も同感です。どんな小さなことも、わかりやすいことも、たとえばお経を上げる等も一つ一つ取り上げて、そこから何が見えてくるかだと思います。スーパーバイザーがものの見方が変われば違ったものが見えてくるとの助言は至言でした。

研究をきかせていただき、人の成長のプロセスには最適な研究手法だとわかりましたが、私の研究には合わないことがわかりました。私の所属するゼミは医療系、看護師が多く、質的研究の手法に悩まれている方が多いです。私が体験したことをゼミに持ち帰り発表し、M-GTA の手法もともに研究していこうと思います。今後も研究会に出席して勉強させてください。ありがとうございました。

.....

- (1) 佐鹿 孝子
- (2) 埼玉医科大学大学院看護学研究科(客員教授)
- (3) 小児看護学
- (4) 障害のある子どもと人々、地域生活、ウェルビーイング、コーディネート、多機能型施設、多職種連携

〈ライフワークとしての研究課題〉

客員教授をしながら、横浜市にある多機能型拠点「郷」でボランティアをしています。

「郷」は“医療的ケアが必要な障害児・者への地域生活の支援”を目的として開設されました。多機能型施設の事業は、①診療所、②往診・訪問看護、③送迎・生活介護・放課後ディサービス事業、④短期入所・日中一時支援事業、⑤相談支援事業、⑥地域交流 です。要するに、どのようなサービスも行うことができます。これらの事業をコーディネートして地域生活が送れるように支援しています。

地域で生活している医療的ケアがある障害のある子どもや人々は、多くの専門職の支援を必要としています。現在は多職種連携をどのようにすればよいかを研究中です。また、看護職が障害のある子どもと人々の身近にいる支援者として、コーディネーターとしての役割を果たすには、どのようなスキルアップをしたらよいかを検討中です。さらに、親の方々がわが子と家族のウェルビーイングを達成するために希望する社会支援について面接調査をする予定です。

現在は障害のある子どもが活用できる多機能型施設が少ないので、横浜市以外の多機能型施設と情報交換をしたいと考えております。会員の皆様で子どもも活用できる多機能型施設をご存知の方は情報を教えていただけると嬉しいです。どうぞよろしく御願いたします。

.....

(1) 鈴木 由紀子

(2) 浜松医科大学 大学院 医学系研究科 看護学専攻

(3) 成人・老人看護学

(4) 臨地実習指導者、看護学教員、看護学生、相互作用、学びの意欲

浜松医科大学の大学院生の鈴木由紀子です。M-GTAの研究会で発表させていただいてアドバイスを頂き、懇親会や毎回の研究会で、研究会の皆様から沢山ヒントを頂きながら、修士論文の再分析や修正がすすみ感謝しております。今回の研究会でも、データを沢山だされていた方の御発表は、分析テーマの絞り込みについて集まっているデータの範囲や御発表の内容から、分析テーマの始点と終点を考えさせられるような内容で、私自身も一緒に考えることができ勉強させて頂きました。分析テーマの再調整はデータをオンにして分析する中で、重要性を実感してきたので、研究会でヒントを頂けるのは貴重なことだと思います。

河本さんの御発表は自身の研究においても「オリジナリティー」をはっきりさせて看護師教育での特徴を実践化に向けて具体的にする部分が課題でしたので、大変勉強になりました。また、就業継続 3 年のなかで他者評価をどのように受けとるのが「看護師が何を体験するのか」というインタラクティブな影響を受けているような御発表でしたので、どんなインタラクティブ性があるのかという視点で分析を進めながら体験されてる何らかの傾向がみえてくるようなら、その時点で再調整されても遅くないのかもと感じました。

データを分析焦点者の立場に限りなく近づかせながら「もし、私が分析焦点者だったら…」と思って分析すると、これまでの考え方や思考に新たな広がりやうまれ価値観が変わるような体験をしました。これが、研究によって研究者が育てられるという事なのかな…という気もしています。単なる勉強、単なる研究でなく、人として成長する喜びもあると思うので、M-GTAの研究を通して、そんな体験をする人が増えることを願っております。

.....

◇M-GTA 研究会第 78 回定例研究会のお知らせ

日時:2017 年 1 月 28 日(土)

会場:国際基督教大学 本館 H-116

.....

◇編集後記

この数年間、ニューズレターの編集に携わっていて、変化を感じています。お忙しい中、近況報告の原稿をお寄せくださる会員の方々が多くなってきました。うれしく、ありがたいことだと思います。近況報告は、研究発表の報告とは違った“読み応え”があります。54年ぶりの11月の初雪など、日本でも世界でも、驚くことの多い1年でしたが、あらためて「広く見る、変化を捉える、深く知る」ことができるようになりたいと思っています。また、来年も、皆さまに、研究会で、あるいはニューズレターを通じて、お会いするのを楽しみにしています。(丹野ひろみ)